

# ペスタロツチの國民教育論

— “An die Unschuld” を中心に —

大久保 哲夫

## はじめに

ペスタロツチ (J. H. Pestalozzi, 1746—1828) の生きた時代のヨーロッパは激動期にあつた。かれの祖国スイスにおいても、カントン (Kanton州) により統治形態の相違はあつてもひとしく一部特権階級が政治権力を掌握し、民衆は重税と圧政に苦しめられていた。また当時は産業革命の勃興期でもあり、都市の商工業発達にともなう資本の都市への集中化は、農民を隷農の境地へ追い込み、多くの農民は工場へと吸収されていつた。このような状況のなかで貧困と圧迫にあえぐ民衆は各地で暴動を起こしており、フランス革命の影響により1798年にはスイス革命がなされた。ペスタロツチの生涯にわたる豊富な活動もこのような民衆の救済と社会の改善を求めたものであることはいうまでもない。そのためかれは時としては貧兒や孤兒を集めて学園を開き、その教育にあたり、時としては文筆活動により民衆の啓蒙をめざし、さらには当時の為政者たちに民衆のための政治を説いた。しかも、かれが偉大な教育者として・近代教育学を築いた一人の先駆者として後世に知られているように、根源においてかれの活動は民衆の教化にあり、それによりかれは民衆に自己救済への道を開こうとしたといつてよい。かれが為政者に民衆への愛を求めるとき、それはまずなによりも民衆の教化を意味するのである。したがつて國民教育の実現はかれの終生の課題であつたといつても過言ではない。

それをいま十分論じる余裕はないので、わたくしは上のような観点に立つてペスタロツチの後年の代表作「わが時代とわが祖国の純真な、真面目な、高潔なひとびとに訴える」“An die

Unschuld, den Ernst und den Edelmut meines Zeitalters und meines Vaterlandes,, (1815)

(以後「純真者に訴える」と略す)により、かれの思想の本質をあきらかにしたい。なぜなら、この著作は混乱した時代社会への発言であり、また本書成立までの長年にわたる思索と実践により、かれの思想は十分成熟しており、それがここに結晶されているからである。そこでわたくしはかれの前半生の代表作に示された諸思想をふりかえりつゝ、この「純真者に訴える」を中心にしてかれの國民教育論について考察を試みたい。

## 第一章 時代の問題

フランス革命という劃期的な大変革に直面し、その原因を探究したペスタロツチは、「然りか否か」“Ja oder Nein?,, (1793)において、「あらゆる可能な政治形態のうちに専制政治への傾向がある」(V. S. 317)とのべているが、皮肉にもそのことばをうらがきするかのよう、革命後の混乱はやがてフランスに専制政治をもたらした。ナポレオン・ボナパルト (Napoleon Bonaparte, 1769—1821) が総裁政治を倒して第一統領の位につき (1798)、さらに1804年には皇帝に即位してあらたなる強力な専制政治を推進したのである。かれは周知のように国内からその勢力をヨーロッパ大陸に拡大し、1810年ごろにはナポレオン帝国は隆盛をきわめた。

しかし、イギリスに対する大陸封鎖令を徹底させるべくロシアに遠征したのが失敗に終り (1812)、続いてライプチヒの大会戦で敗北にあい (1813)、ついに1814年には退位のやむなきにいたつた。その結果、フランス革命やナポレオン解放戦争の産物である自由主義、国民主

義の精神を否定し、革命前の絶対主義体制を復旧維持しようとする保守反動主義がいつそう強大になり、ウィーン会議（Wienerkongress, 1814—1815）もまたこのようにいわゆる「正統主義」の原則に導かれたものであつた。

こうしたヨーロッパ諸国の動向はフランスとドイツに隣接するスイスにも大きな影響を与えた。スイス革命により憲法や諸制度もフランス化されていたスイスにおいても、ナポレオンの失脚により反動勢力が容易に勝利をえたのである。革命がもたらしたすべてのものを憎悪軽蔑していたスイスの反動派は、すでに消え去つた自己の過誤を忘れ、それだけにいつそう、美化された古い時代を再現したいという欲望に燃えた。昔のスイス連盟を完全な形で、すなわち同盟地方と従属地方という関係で再興しようと企てた。他方この特権貴族的カントンに反対した新興のカントンは、武力によつて自己の独立を擁護する用意のあることを示し、内戦の危機さえみられた。これはロシア皇帝アレキサンダー一世（Alexander I, Zar von Russland, 1801—1825）の干渉により救われたが（1814）、連合諸国は革命やナポレオンを想起させるような憲法の存続を許さず、ナポレオン憲法を廃棄したスイスにとり、こうした国内対立にあつて新憲法を制定することが急務であつた。

わたくしがここでとりあげた「純真者に訴える」は、このような歴史的状況にあつて1813年より1815年まで執筆され、その内容も新憲法問題を中心とする時代社会への批判につらぬかれている。

しかしこの著作には、憲法論や政治論よりもむしろ道徳論と教育論が説かれている。しかもペスタロツチはヨーロッパの精神状況を「然りか否か」や「探究」“Meine Nachforschungen über den Gang der Natur in den Entwicklung des Menschengeschlechts.”（1798）に示された叙述様式にも似て、やや歴史的に考察している。すなわちヨーロッパや祖国の現実を「墮落」“das Verderben.”として把握するペスタロツチは（VII, S. 385）、その源泉を「朕は国家なり」“L'etat—c' est moi!”といひ、中世封建

秩序を破壊して絶対専制君主の座に君臨し、ヨーロッパに専制政治をもたらしたフランスのルイ14世（Louis XIV, 1643—1715）に求めている。ペスタロツチによれば、「その結果は革命に先行するヨーロッパ諸国民に道徳的、公民的弛緩をもたらし、同時に国家自体もまた衰弱し、以後それに耐えかねた「sansculottische Volksempörung,」その結果としての「野蛮政治」“Regierungsbarbari,」への移行、国家墮落の最高潮時におけるボナパルトの興隆とその没落、「願健主義」“Moderantismus,」の復活、と、一連の政治的事件が続き、しかもこのような不安定な時代の底に共通した病因が存するのである。

それはペスタロツチにとり人間の内面的精神的問題であることはいうまでもない。なるほどかれは祖国スイスの新憲法制定を前にして、スイスの歴史、とくにかれの祖国ノイエンブルヒ（Neuenburg）の歴史にそくして、個人の自由と権利の尊重という政治論をのべてはいるが、たとえばかれの「わが祖国よ！」“meine Vaterland!,”ということばをとりあげてみても、たんにスイス連邦やノイエンブルヒのひとびとに伝統的精神への復帰を呼びかけているのではなく、広くドイツをも祖国と呼び、さらには国家の限界を越えてヨーロッパにかれの呼びかけは拡大されている。しかもそのさい、「道徳的、精神的、公民的に沈んだヨーロッパの救済は、教育、人間性の陶冶、人間の陶冶によらなければ不可能である」（VII, S. 394）ということばからも、地域的な拡大とともに普遍的人間の内面性へと主題が深まっていることはあきらかである。あるいはそれをペスタロツチにおいては時代と祖国の特殊な問題が時空を越えた人類共通の問題として発展し、逆に抽象的普遍的な思想が具体化され歴史化されているといつてよからう。だからこそ当面の祖国の政治問題に関し、ヨーロッパの精神状況の歴史的考察を試み、政治論の究極に人間性の陶冶を求めたのである。そこにわれわれは、かのフイヒテ（J. G. Fichte, 1762—1814）がナポレオン軍のドイツ侵入に対し、敗戦ドイツの国民に祖国愛を奮起させようとし

た「ドイツ国民に告ぐ」“Reden an die deutsche Nation,, (1808) において、ドイツ民族の伝統のなかに人類永遠の理想を求めたのと同じ響きを感じることができる。したがってわたくしは、ペスタロツチの祖国スイスの歴史や現状についての詳細な考察はさけ、できるだけ普遍的な論述を軸として分析すべきであろう。シュプランガーがここでは時代に制約された内容よりも「概念機構」“Begriffsapparat,, が重要であると説くように、<sup>注7</sup> わたくしも本論文においては主要な概念を中心に論じることにした。

注 1. 本論文のテキストは、H. Pestalozzis gesammelte Werke in 10. Bd., herg. v. E. Bosshart, E. Dejung, L. Kempfer u. H. Stettbacher. (1944—1947) による。

注 2. 歴史的背景の叙述は次の書物による。  
A. Heubaum, “J. Heinr. Pestalozzi,, (1923) S. 298. シャルル・ジリヤール著「スイス史」(江口清訳)白水社 今来陸郎編「中欧史」(スイス編)山川出版社

注 3. ペスタロツチの初期の作品「隠者の夕暮」(1780)や、「リーンハルトとゲルトルート」(1781—1787)では叙述が平面的で、時間的な展開はみられないが、「然りか否か」にいたって歴史的、発生的な考察がなされている。このような思惟方法をデレカートは従来の「静的、固定的概念から無限に動的な歴史的思惟への移行」と呼び、ここに「弁論論の解決策としての歴史主義」“der Historismus als Versuch zur Lösung der Theodizee,, がみられるという。  
E. Delekat, “J. H. Pestalozzi,, (1928). S. 180.

注 4. ペスタロツチの「隠健主義」とは、ナポレオン没落後の復古的な「正統主義」を意味するものである。それに対してかれは「われわれはいまや怪しげな隠健主義の出現により、過度のサンスキエロツト的、君主的暴力のあらわれる直前の国家衰弱へと急速に進んでいる」(VII. S. 223.) とのべ、隠健主義のもつ欺瞞性を暴露している。

注 5. オイバウムは、「それは深く国家社会の本質にある。それは人間自身の本質にある」“Sie liegt im Wesen des Menschen selbst,, という。

A. Heubaum; a. a. O. S. 300.

注 6. W. Flitner; “Pestalozzis Nationalpädagogik,, Eine Analyse der Schrift “An die Unschuld, den Ernst und den Edelmut meines Zeitalters und meines Vaterlandes,, (Aufsatz in “die Erziehung,, — 12. Jahrgang, Heft 9. Juni 1937) S. 397.

注 7. E. Spranger; “Pestalozzis Denkformen,, (1946) S. 56.

## 第二章 人間の二重性と家庭の意義

ペスタロツチの思想の根底に人間性 (Menschennatur) の探究がなされていることは、かれの最初の代表作「隠者の夕暮」“Die Abendstunde eines Einsiedlers,, (「夕暮」と略す)の冒頭の有名な、「玉座の上にあつても木の葉の屋根の蔭にあつてもたがいにひとしい人間、真の人間というこの人間とはいつたいなにか」(VIII. S. 1.)ということばからも明白である。さらにかれの哲学の書「探究」は最初「人間論」“Mein Buch über den Menschen,, という表題がつけられていたように、かれの人間学 (Anthropologie) の書でもあり、H.バルトも指摘するように、ペスタロツチにおいては政治思想と教育思想と人間学の三者は密接に結合しているのである。そこで本著作においてもかれの人間観を<sup>注1</sup>まず考察する必要があると考える。

ところでペスタロツチの人間性についての探究は、すでに前半生の「夕暮」、「リーンハルトとゲルトルート」、「立法と嬰兒殺し」、「然りか否か」、「探究」など一連の作品を通じて徹底的になされている。いまそれを論じることはいわたくしの主題ではないので、これをペスタロツチの重要な思想展開として明晰に分析したデレカートにより、ペスタロツチは人間性を「高き自然」“hohe Natur,, と「低き自然」“niedere Natur,, という二重構造において把握していることだけをのべておきたい。<sup>注2</sup>ここでとりあげている「純真者に訴える」もまたこうした人間の二重性を根底にして政治や教育が論じられているのである。

すなわち、ペスタロツチによれば人間は次の

二つの本性から発展する。「第一はあらゆる動物と共通する感性的な面からであり、第二は地上のあらゆる生物から区別されるわれわれの本性のより高い人間の本質からである」。(VII. S. 197.)前者が感性的(sinnlich)であり動物的(tierisch)であるなら、後者は道徳的(sittlich)であり人間的(menschlich)であるということができよう。したがって両者は光の世界と闇の世界のごとく本質的に異り、しかも人間の内で安易な共存をするのでなく、「精神と肉体との抗争、人間的心と動物的心との抗争においては、たえず一方が支配し他は服従する」(VII. S. 353)という厳しい敵対関係にあるのである。

両者の本質的相違をさらに求めるなら、動物的本性の根本的特質は感性的我欲(sinnliche Selbstsucht)にあるということができる。ここではすべてが感性的欲望に支配され、それ以上に自己を向上させるものはなにも望まれない。強者は弱者を圧迫し、富者は貧者をかえりみず、逆に弱者や貧者は卑屈になり、こうした人間の世界では社会生活は退廃の一路をたどるのみである。しかもペスタロッチは「感性的人間は、自己の感性的我欲の圏外にあるものはなにも尊敬しない。……かれは神の御心のことがらをぜんぜん尊敬しない。なぜならそれは感性的我欲の圏外にあり、またあらゆるをえないからである」(VII. S. 203)とのべ、感性的人間にはなにも神への信仰の欠除していることを歎いている。

ここに人間の感性的欲望を制し、墮落した人間を救済する道を求めることができる。その根源は「人類を高める可能性は、人間性自体の奥底に基礎づけられ、人間の夢想的追求や人間の情欲の幻影を越えて、われわれのうちに神より与えられた真理からでるのは当然である」(VII. S. 398)ということばにも示されているように、「高き自然」として神から授けられた真理(Wahrheit)の感情であり、それは墮落以前の純粹無邪気な感情として人間の奥底に内胚する。しかしそれはあくまで可能性として存在するのであり、それゆえ成長とともに感性に支配される危険性もあり、かならずしも確実な発展をとげ

るとはかぎらない。このような人間の二重的自然性が相争う岐路にあつて必要なのは、人間性の陶冶(Bildung)であるということができる。しかもここで意味する陶冶とは人為的技術ではなく、「神と自然による人類最高の技術」(VII. S. 206)である。神より附与された素質が、神の技により自然に陶冶されるのである。したがって人間にとり「人間性のうちにある神を尊敬し、外的動物的感性を越えて内的本性を高めることが自己の唯一の価値」(VII. S. 199)であり、ここに神に対する尊敬、神への信仰が必要とされる。

このような観点から、ペスタロッチは教育に關しても「われわれの動物的自然の要求を精神や心情のより高い人間的意志に従わせることが、人間教育(menschliche Erziehung)の配慮と技術の中心点であり、本質であり、人間教育に必要な第一の、そして唯一のものである」(VII. S. 212)とのべ、人間教育の本質を動物的我欲の克服においている。ではそれは現実にはどのようにしてなされるのであろうか。

人間性発展の出発点は人間の内面にあり、ペスタロッチはそれを平静で無感情な植物に近いものとして嬰兒の「聖なる安らぎ」“die heilige Ruhe,,に求めている。「夕暮」や「探究」の思想とひとしく、純粹で無邪気な安寧の境地に動物的衝動と異なる人間の本質的特性を認め、それを子どもの道徳的、知的、身体的力の合自然的発展の基底としているのである。しかしこの<sup>注3</sup>ような嬰兒期の本性は、やがてそれとまつたく逆の動物的欲望に支配される危険にあり、そこで聖なる安らぎが動物力に圧迫されずに発展するには「母の感化、母の配慮、母の技術」(VII. S. 209)が必要とされ、家庭における母親の教育的役割が重要となつてくる。母の愛情深い配慮により嬰兒には母に対する愛が芽生えてくる。嬰兒の母に対する愛とは、母に感謝し母をまつたく信頼することであり、その愛と信頼がやがて持続的な完全なものへと発展していくのである。それをペスタロッチは「人間的発展の基礎、あらゆる人間的力の生じる源泉は、無邪気と愛と信頼(Unschuld, Liebe und Glaube)であり、

逆に動物的發展の基礎、あらゆる動物的本性の源泉は、無邪気や愛や信頼と結びつきえない動物的墮落の不信(Misstrauen)である」(Ⅶ. S. 212)とのべ、愛と信頼の感情を人間性陶冶の最初にして必要不可欠の条件としているのである。

そして、母の配慮(Muttersorge)により自己のうちに聖なる安らぎを保持し、人間に対する愛という至上の感情を喚起された子どもは、やがて愛の本質にまで醇化されていく。「母に対する愛からこの道(筆者注:「自然の道」“Gang der Natur,, のこと)において神に対する愛が、母に対する信頼から神に対する信頼が、単純に愛らしく発展し、母の腕に抱かれた人間的な安らぎが、子供のうちで神の腕に抱かれた天上の安らぎへと高まつていく」。(Ⅷ. S. 217)すなわち、子どもは母への愛と信頼という地上における最も自然な関係を基礎として、永遠にして完全な神への愛と信頼にまで高まり、そこに人間の道徳的力は確乎したものとなる。こうして家庭において自然の道に導かれた子どもは、内面的に自己の向上を努めるとともに、<sup>注4</sup>外的関係に対しては愛をもつて臨み、かくして「聖なる居間から世界へ、世間の学校へと出ていく」(Ⅶ. S. 219)のである。ペスタロッチによれば、子どもが動物的感性に<sup>注5</sup>支配される以前に、居間における母親の教育により人間性の陶冶がなされるべきであり、それを基礎としてかれの教育思想や政治思想が展開されているのである。

このように、人間の内奥に神より与えられた高い素質があり、その陶冶、すなわち「人間を人間らしくする技術」“die Kunst, den Menschen menschlich zu machen,, もまた「人間性自身のうちに確乎として存在する」(Ⅶ. S. 227)というとき、ペスタロッチの教育思想において神の存在は重要な意義を有するのである。そしてまた宗教的愛は隣人愛へと拡大することにより倫理的性格をもち、それゆえ「純真者に訴える」に対するフリットナーの「ペスタロッチの倫理観は実体はキリスト教であり、形式は啓蒙主義的である」ということは適切な批評であると<sup>注6</sup>考えた。このことをいつそう明確にする

ために、わたくしは次に人間本性の二重性が現実の社会にどのようにあらわれており、ペスタロッチがそれをどのように受けとめているかという点について考察を進めたい。

注 1. H. Barth, “Pestalozzis Philosophie der P. olitik,, (1954) S.24.

注 2. デレカートは自然概念を考察し、「自然」“Natur,,、「人間性」“Menschennatur,, などということばは宗教的意味をもつという。他面、「自然」はまた人間の卑俗な面をも意味するが、それとて宗教的な否定面にあらわれてくるものであり、前者をデレカートは「高き自然」、後者を「低き自然」と呼んでいる。F. Delekat; “J. H. Pestalozzi,, S.S.101～104.

注 3. ペスタロッチは本書において、子どもの道徳的・宗教的陶冶(die sittliche und religiöse Bildung)、精神的・知的陶冶(die geistige und intellektuelle Bildung)、および身体的陶冶(die physische Bildung)の基礎が家庭教育にあると説き、母の配慮と技術が子どもの心と頭と身体に与える影響について詳細にのべている。(Ⅶ. S.S.402—415)これは子どもの三つの力の調和的な自然陶冶、その根源としての単純で無邪気な感情、最初の教育者としての母親の役割、というかれの基礎教授法の理念を示すものである。ここから、のちに論じるようにかれの教育思想もつ社会的意義を理解することができる。

注 4. このような家庭教育観は、初期の「夕暮」ではまだ十分のべつくされていない。これが徹底されるのは「ゲルトルートはいかにしてその子を教えるか」“Wie Gertrud ihre Kinder lehrt?, (1801)においてであり、その第13信に示された道徳教育・宗教教育の思想は、本書の思想と同一である。(Ⅸ. SS.293—304)

注 5. このように自己自身のうちに中核があり、家庭において基礎陶冶がなされたのち世間に出ていくという思想は、シュブランガーが「生活圏の理論」“die Theorie der Lebenskreis,, と名づけた「夕暮」の思想に近いものである。E. Spranger; “Pestalozzis Denkformen,, S S. 34—39.

注 6. W. Flitner; “Pestalozzis. Nationalpädagogik,, S.400.

### 第三章 ペスタロッチの社会観

前章で人間を二重構造的に把握したペスタロッチは、感性的・動物の人間を発展させ、社会における「大衆 (Masse) や民衆の群 (Volkshaufen)、およびかれらの要求それ自身のために設けられた施設や規則や陶冶手段」(Ⅶ. S. 200) をそれと同一視し、これらを「文明のことがら」“Sache der Zivilization,, と呼んでいる。人間の感性的要求をみだし、それにいつそうの刺激を与える社会の組織や機構、職場や学校は、人間性の陶冶に反し、人間の畸形化と社会の退廃をもたらすものであり、それをペスタロッチは「文明の墮落」とみなすのである。これに対し人間性を陶冶し感性を克服し精神を高めるような陶冶手段を「国民文化のことがら」“Sache der Volkskultur,, と呼んでいる。人間性の陶冶は、母と子の関係に示されたように、ほんらい、「顔から顔へ」“von Angesicht zu Angesicht,,、「心から心へ」“von Herz zu Herz,, となされるのであり、それゆえペスタロッチは「人間性への陶冶、すなわち人間陶冶、およびいつさいのその手段は、起源と本質において永遠に個人のことから (Sache der Individuum) であり、個人の心情および精神と密接に結びついている制度のことがらである」(Ⅶ. S. 201) という。文明により墮落した人間は人間の本質を喪失した大衆にすぎず、このようなペスタロッチの「大衆」概念は、「自己疎外」をもつて大衆を定義する現代の社会学上の概念にも似たものを感じさせる。H・バルトは、ペスタロッチにおける大衆を独立性 (Selbatandigkeit) を喪失した人間と規定しており、したがって逆に個人を規定して独立的な精神<sup>注1</sup>をそなえた人間ということができよう。これを「探究」にあらわれた概念と対照するなら、そこでの「社会状態」“gesellschaftliches Zustand,, は「文明」に近く、それゆえ社会状態における人間を大衆と呼ぶことができ、逆に「道徳状態」“sittliches Zustand,, は「文化」に近く、道徳状態における人間は個人としての存在である。

さて、ペスタロッチは、文明と文化、大衆と

個人という関係を「集団的存在」“die kollektive Existenz,, と「個体的存在」“die individuelle Existenz,, という概念で説明している。すなわち、「人類の集団的存在は、ほんらい<sup>注3</sup>、動物と共通なわれわれの力や素質を主として要求し」、(Ⅶ. S. 314)他方「人類の個体的存在は……われわれの全面的な力や素質を要求し、とくに人間以外の被造物とは共有しない力や素質を要求する」(Ⅶ. S. 315) のである。ペスタロッチは、すでに前章でものべたように、墮落した文明を克服した文化の高揚を理想とし、それにより個人の独立を基礎にした社会を求めているのである。

ところでペスタロッチにとり現実には墮落した文明の社会であり、そこに生きる人間の大多数は感性的欲望にかりたてられた大衆にすぎないということはいうまでもない。しばらくかれのことばに耳を傾けることにしたい。

いまや、人間陶冶の出発点である家庭はほんらいの機能を失つて「感性的で世俗的な母親の居間」(Ⅶ. S. 231) となりはて、子どもの無邪気な感情は成長とともに動物心に犯されている。「それは悲惨である。しかしさいわいにもそれは神より人類に与えられた居間の姿ではなく、衰弱した時代の姿であり、反自然的な上品ぶつた混乱した時代精神の姿である」。(Ⅶ. S. 231) しかもそれは神聖な居間の掠奪 (Wohnstube-raube) のみならず、さらには時代の宗教にもおよび、宗教もまた文明墮落へと織りこまれていたのである。(Ⅶ. S. 234) このような時代の傾向は、混乱の一途をたどつたヨーロッパの政治過程をみればあきらかなように、時代精神 (Zeitgeist) のあらわれであり、とくに墮落した政治のもたらす弊害は大きかつた。なるほど社会秩序を維持するためには政治的統制力が必要であるけれども、「文化なき文明の力は独立や自由や正義や技術をかえりみず、人間を大衆として暴力により統一する」。(Ⅶ. S. 291) それに絶対主義の政治であり、隠健主義の現状である。そこでは民衆の力や国家の力は衰退し、国家は必然的に解体へと陥る。ナポレオンが強力な専制政治をはたしたのはいかれの剣の威力に

よるのではない。「かれの精神力が人類の弱点を抗しがたい力でとらえた」のであり、かれの政治は「人間の極度に墮落した状態における人間技術の最高の典型であつた」。(VII. S. 326)それほどヨーロッパは弛緩して<sup>注 5</sup>いたのであり、ナポレオンの没落したのちの現在もいぜんとして政治は集团的ことがらにとどまり、個人的状況 (Individuallage) や個人的要求 (Individualbedürfniss) はまったく無視されている。(VII. S. 330) 貴族にも、役人にも、職人にさえも存在するのは自己の利益のみを追求する「党派心」“Esprit du corps,, だけであり、「国民の個人的向上という高い精神や、国民の一般的向上醇化を可能にし確保するような支配様式に対するわが祖先の要求は、いまや消滅した」(VII. S. 369)のである。

このようなヨーロッパの現状から、ペスタロツチは国民文化 (Nationalkultur) ないし民衆陶冶 (Volksbildung) を必要とするにいたる。かれは「探究」において、個人は国家に優先すべきであると説き、(VII. S. 144) 国家の目的や支配者の私利私欲の犠牲にされる国家宗教 (Staatsreligion) を排し、真の国民宗教 (Nationalreligion) を求めたように (VII. S. 237) 個人の人格形成を基礎とする国民文化の発展を望んでいるのである。このようなかれのねがいが新憲法制定を前にし、政治の領域でどのように位置づけられているのか、次にその点について考察したい。

注 1. H. Barth; “Pestalozzis Philosophie der Politik,, S. 85.

注 2. 「純真者に訴える」が「探究」の思想を継承発展させているということは、研究者のひとしく認めるところである。たとえばそれを次の書物にもみることができる。

A. Heubaum; “J. Heinr. Pestalozzi,, S 300  
F. Delekat; “J. H. Pestalozzi,, S 249.  
E. Spranger; “Pestalozzis Denkformen,, S. 57.

注 3. 人間存在のこのような把握の方法は、ルソーの「エミール」(1762) にあらわれた思想と類似している。ルソーによれば、純粹の自然性、自由と独立を保持した人間は「自然人」

“homme naturel,, と呼ばれ、社会的制度・慣習により自然性を失った人間は「社会人」“homme civil,, と呼ばれる。さらにルソーは自然人を自己自身のために生存する「整数的単位」“unité numérique,, 「絶対的存在」“entier absolu,, と規定し、社会人を逆に分母に支配された社会の部分としてか自己を感じない「分数的単位」“unité fractionnaire,, 「相対的存在」“existence relative,, と規定している。前者はペスタロツチの「個人」ないし「個体的存在」に、後者は「大衆」ないし「集団的存在」に対比されるであろう。Oeuvres complètes de J. J. Rousseau, Edition Hachette, 13 vols. 1906-1910). Emile II. 6. 邦訳 岩波文庫版 第一編 22頁。

注 4. デレカトはこのようなペスタロツチの思想とテンニースの思想の類似性を認めて次のようにのべている。「テンニース (F. Tönnies) の『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』“Gemeinschaft und Gesellschaft,, (1912) の対置は、ほんらいペスタロツチとまったく無関係であるが、『個体的存在』と『集団的存在』の復活にはかならない。テンニースにもまた、かれの社会学の概念様式の背後に、こんにちの大都会の人間の真のゲマインシャフトへの憧憬がある」。(F. Delekat; a. a. O. S 253)

注 5. ペスタロツチは本書のなかでナポレオンについてかなり論じているが、かならずしもすべてを否定してはいない。たとえば「ボナパルトは人類の集成的見解の個人的正義に対する要求を不合理なほどにおしすすめつゝ、それが迷妄不正であることを数世紀来けつて比をみないほど徹底的に暴露したのである。かれボナパルトの出現は必要であった。かれがなした善 (das Gute) はあたらしい。かれのなした悪 (das Böse) はその本質においてけつてあたらしくない」(VII. S. 329) とのべ、かれ以前からすでにあつた政治的腐敗をかれが暴露したことにむしろ感謝している。ペスタロツチはナポレオンの出現をいわば「必要の害悪」“ein notwendiges Übel,, として把握し、そこに積極的な意義を求めているのである。

#### 第四章 政治の役割とその限界

理性に人間の本質を認め、理性の発展による人間と社会に無限の進歩を信じた近代合理主義においては、国家もまた人間理性の所産として合理的に構成された人為的機構とみなされるのがつねであつた。そこでは、国家は理性の実現されたものとして人格的主体としての価値が附与されていた。それは「国家は人工的人間であり、主権は国家における人工の魂である」とのべるホツブズにはじまり、近世をつらぬく<sup>注1</sup>国家理性 (Staatsrason) のイデオロギーとなつたのである。しかしルソーが鋭く批判したように、現実の国家と善は一致するものではなく、むしろ背反對立の様相を示すのが現状であつた。ペスタロッチもまた国家機構をほんらい中立的なものとして把握し、しかも人間性が相異なる二重性の矛盾をうちにはらんでいるように、「統一的国家も自己のうちにかゝる矛盾の萌芽を有している」(VII. S. 296) とのべている。したがつて国家は善にも悪にもなりうる存在であり、かれの政治批判と政治へのオプティミズムはここに由来するのである。ではかれにとつて政治とはどのようなものであるのか。

いまペスタロッチにしたがつてかりに人類の社会的結合以前の状態を考えるなら、そこでは人間は動物的自由と動物的力のみで生活しており、「人権」"Menschenrecht," はまだ問題とされていない。人間が社会的統一に入つたのは、このような自然状態の改善——土地の耕作 (Kultur) と自己自身の教化 (Kultur) ——を目的としたからであり、それゆゑ人間は自己自身に關しては神より与えられた人間個有の本性の向上に、また社会的政治的には「人間の権利のより高い基礎づけ」(VII. S. 302) に努めなければならない。ペスタロッチは国家の主権 (Souveranität) について、それはほんらい「人間性が社会的中心点を要求した結果」(VII. S. 302) であり、支配者といえども主権の理念に背いて個人の権利を無視することは許されないという。社会は「文化」を目的として成立したのであり、主権は「正義と技術により、独立と自由

をもつ個人としての人間を統一する」(VII. S. 291) いわゆる文化の力でなければならない。主権が文化を目的とするかぎり、それは「個人のことから」であり、「顔から顔へ」、「心から心へ」という支配者と被支配者の人格的關係となり、このようにして主権に倫理的性格が要求されるのである。

<sup>注2</sup>したがつてペスタロッチの政治論においては、政治形態よりも政治道徳が重要視される。君主制であろうと共和制であろうと、人間性の尊重・人権の尊重を欠くならば、それは墮落した文明の政治として強く否定されるのである。しかもかれが真に求めているものは、支配者と被支配者が人格的に結合した秩序の世界である。その秩序の根底は、「玉座の迷妄と国民の迷妄の両者に対し、それを防ぐのは神の秩序 (Gottes Ordnung) である」(VII. S. 305) ということばにみられるように、「神の秩序」にあり、究極的にはそれにより社会の秩序は維持されるのである。かれの人間觀の根底が宗教的であつたように、政治觀の根底もまた宗教的である。すなわち人間と国家は根本において神によりささえられているのである。

しかしそれが「夕暮」の親心 (Vatersinn) と子心 (Kindersinn) というたんなる心情的關係ではなく、支配者と被支配者の両者に権利義務が規定されているのは、歴史の発展やかれの思想の展開を示すものとして注目されよう。

すなわちかれは、主権者に対してはその権限の絶対性・神聖性を認め、民衆はそれに従うべき義務のあることを次のように説いている。

「社会という概念は、なによりも全体の力を確実に基礎づけることを要求し、個人や個人の団体的結合の矛盾や反対から独立し、合法的に構成された権力を要求する」。(VII. S. 305) 「首長が自己の権利を強力に行使するのを妨げることができ、また妨げるようにする社会が滅亡するのは、社会が無法な要求をしたからである」。

(VII. S. 305) したがつて主権は古来諸民族により「神々しい権力 (göttliche Macht) として認められており」、しかもそのうえ宗教的諸国民には「人間的な弱さや情欲を越え高められた力」



として尊敬されてきたのである。(VII. S. 303)

他方主権を有する支配者もまた民衆に対して義務を課せられていることは、主権の成立事情を考えれば明白である。主権は、人間の感性的欲望を制限し秩序を維持するための社会的要求から生じたものであり、それゆえ「地上における人類の永遠にして神聖なすべての権利の保護」(VII. S. 303)を義務とするものである。なるほど主権は神聖にして絶対的な存在であるが、個体的存在としての個人、すなわち個人の自由と独立の権利を尊重するかぎり主権に存在価値が与えられ、個人を犠牲にすることは主権といえども許されない。けだし、「神と隣人に対し、自己のうちにある真理と愛に感動して、神の前、隣人の前、自己自身の前に立っている個人こそ、人間性の真の醇化とその醇化を覚醒する真の国民文化の唯一の基礎である」(VII. S. 316)から。

このように個人の尊重と国民文化の発展を求める思想は、具体的な政治の場において次のようにあらわれる。すなわちペスタロッチは、軍事・警察・司法・財政は国家の権力機構の範囲のもとにあつても、「教会・学校・救済の事務は人類の集団的要求からほとんど独立した個人のことからや家庭生活のことから」(VII. S. 317)としてとり扱われるべきであるという。たとえば、学校はたんに文明的知識の機械的記憶や文明的技術の肉体的訓練の場ではなく、「われわれの人間性を全素質にわたつて調和的に要求し、諸力を家庭生活という聖地やその神的な意味と一致させつつ展開させる」(VII. S. 318)ことを目的とする。このように学校が人間性陶冶と国民文化形成の場であるかぎり、学校は家庭とおなじ役割をはたすのであり、それゆえ国家権力による支配の外に置かれなければならない。

なおそれに関連して、ナポレオンが時代社会に教えた「子どもは両親に属さない。かれは国家に属する」(VII. S. 331)という教育上の根本命題に対し、ペスタロッチは、「ありがたいことに子どもはなおわれわれに属している。かれらはわれわれを通して——他の誰を通してでもなく——祖国に、国家に属する」(VII. S. 331)と反駁しており、ここに個人対国家の関係を知

ることができる。これまでしばしばのべてきたように、かれは個人尊重の立場にあり、教育もまた個人のことがら、個人の諸力の陶冶による独立の人間像の形成を目的とするものである。このように陶冶された個人を基礎としてはじめて国民文化の発展は可能とされ、政治がそれに不当な干渉をすることは許されない。ペスタロッチが求め、教授法の研究に専念していた教育は、国家の目的や支配者の要求に合致した国家教育(Staatserziehung)ではなく、国民のすべてに幸福と繁栄をもたらす国民教育(Nationalerziehung)であり、民衆教育(Volkserziehung)であつた。かれの政治対教育の関係は、支配服従の関係でもなければ両者がまったく分離しているのでもなく、むしろかれは政治が教育に奉仕することを要求しているとみなすべきであろう。フリットナーも指摘するように、かれは国家を国民のための奉仕機関とみなしている<sup>注4</sup>のである。

ペスタロッチは、プラトンの国家説同様国家の力を国家を構成する国民のエトスにおいてみているが、プラトンが国家を善のイデア実現のための教育機関とし、個人の生活を国家に統一したのに比して、ペスタロッチは国家を個人の結合体とし、個人の独立のうえに国家の独立が、個人の文化のうえに国家の発展がある<sup>注5</sup>と考える。このような基本的観点に立つてかれは国民文化に対する政治の役割を論じているのである。

さて、ペスタロッチは支配者と被支配者の権利義務を明確に規定したのち、それを永続的に維持するために立法を必要としており、法律を無視して倫理的関係を説いているのではない。かれはそれを「国家の成員、すなわち公民は恩恵(Gnade)によるのではなく、自己の権利(Recht)とそれをささえる法律(Gesetz)によつて生存すべきである」(VII. S. 304)とのべている。新憲法問題に対する発言ということを除いても、青年のころから法律に関心を抱いていたペスタロッチにとつて、このことばは当然である。しかも法律は強制手段ではなく、倫理的な性格を有するものであつた。「純真者に訴える」のことばを用いるなら、国民文化の向上を

目的としなければならない。しかし他方、「リーンハルトとゲルトルート」でも法律に対する過信に終らず、民衆の永遠の救済を宗教に求めたように、「人間性を満足させる道徳の内的な衰弱は、立法や制度の叡知によつてはけつして完全には止揚されない」(Ⅶ. S. 297)とのべ、深く人間陶冶にまで立ち入ることのできない法の限界を示している。それを越えて人間性を陶冶しうるものが教育にほかならないのであるが、その点についてはのちに詳しくふれるであらう。

むしろここでは、人間諸力の陶冶が「覚醒され活気づけられた国民性により内的に確実にされ、それと一致した立法により外的に確実にされる」(Ⅶ. S. 422)ということばにみられるように、法律は目的そのものではなく外的な一つの手段であること、および、法律は高い国民性と一致しなければならないという点に注目したい。ペスタロッチはまた「立法や行政が国民文化と一致して進み、国民文化とともに、そしてまた国民文化を通じて発展してくるいつそう高貴な権利観から生じるばあい」その役割を全うしうるといい、(Ⅶ. S. 309)立法は国民文化を基礎としそれと一致すべきであると説いている。これらのことばのなかに、かれがナポレオンの支配から解放されふたたび自由を与えられたスイスのために、なによりも国民文化の向上を求めていることが如実に示されている。ここでわたくしは必然的に国民教育実現の道を解明せざるをえないのであるが、そのまえにかれが立法の根拠としその理想と仰ぐ国民性や国民文化とは具体的になにを意味するのか、という点について若干の考察をしておきたい。

ペスタロッチはそれをスイスの伝統的な公共心(Gemeinsinn)や、祖都ノイエンプルヒにみられた「王侯のもとに自由な、王侯に正しく支配された公民の高い公民心(Bürgersinn)」(Ⅶ. S. 451)という語で表現しているが、このような精神は、ファイヒテがドイツ民族の優秀なるを説いたばあいとは異り、さらに古くは、中世の高貴な「騎士的精神、騎士的名誉」“Rittersinn und Ritterehre,, (Ⅶ. S. 451)、「ヘンザ同盟都

市」(Ⅶ. S. 417)、イギリスの「人身保護令」(Ⅶ. S. 418)にも同じ性格をみている。それらに共通することは、相互に自由と権利を尊重し、信頼しあい、協調して共同体の繁栄に努めることであり、いわば共同体の道徳的基礎をなす精神である。ペスタロッチのこのようなスイスの伝統的精神<sup>註5</sup>への憧憬は、青年時代の「スイス協会」“die helvetische Gesellschaft,,の活動にすでにみられ、終生変らざるところである。こうしてかれの理想は狭い共同体における心情のことからとなり、隣人愛と祖国愛に終るのである。支配者には究極において民衆への愛が要求され(Ⅶ. S. 371)上層階級と下層階級の心情的調和が国家の秩序を保持することになるのである。ここにかれの理想主義のもつ歴史的限界を指摘することができる。

注 1. ホッブズ著「リヴァイアサン」(+) (水田洋訳、岩波文庫) 37頁

注 2. 高坂正顕著「歴史の世界」269頁

注 3. デレカートは、教会と学校と救貧施設を、「拡大された家族社会の理念」(Idee der erweiterten Familiengemeinschaft)のもとにあるかぎり人間性の陶冶をなしうるものであるとし、家族社会が人間の共同体の基礎であることを指摘している。

F. Delekat; ‘J. H. Pestalozzi,, S. S 253—254.

注 4. W. Flitner; ‘Pestalozzis Nationalpädagogik,, S. 410.

注 5. フリットナーは、「本著作の問題は国家の限界づけではなく、共同体の内部形式とその道徳的、人間的基礎づけのみにある」という。

W. Flitner; a. a. O. S 397.

〔補説〕 上にのべたようなスイスの伝統的精神復活に関し、ペスタロッチはその担い手としての中産階級(Mittelstand)を理想としている。なぜなら過去のスイスの諸都市では、中産階級がその中核となつて共同体の繁栄に努めており、そこでかれは「われわれは似合いもしない貴族感情をまずすて、われわれの古い共同体やその基礎をなす中産階級に対する尊敬へと高まらなければならない」(Ⅶ. S. 279)という。また中産階級は国民の意志を代表するものであるとして、「玉座と国王の意志へ

のhigh尊敬なしには君主政治がうまくいかないと同じように、中産階級と国民の意志への尊敬なしには共和政治はうまくいかない」(VII. S. 281)という。貧困の問題はかれの生涯にとり大きな課題であり、「リーンハルトとゲルトルート」にみられた貧民救済の経済政策や、職業教育、のちの基礎教授法のなかの労作教育などにおいてかれが民衆の生活の安定を求めたことや、逆に有産階級への批判からもこのことは当然といえよう。

しかしペスタロツチの意味する中産階級は、たんに経済的のみならず社会的にも重要な役割を演じ、精神的に独立した人間である。本著作における「個体的存在」としての人間の本質を「独立」とみなしたH・バルトも、それには「経済的、政治的、法律的、道徳的独立」が含まれるとしており、(H. Barth; "Pestalozzi's Philosophie der Politik.", S. S. 104-116)、ペスタロツチは国家の成員としてこのような人間像を理想としているのである。

## 第五章 国民教育の実現

すでに考察してきたように、ペスタロツチが国民文化や祖国の伝統的精神を説くとき、それはけつして国家という狭い枠に限定されたものではなく、また新憲法制定にさいして理想的憲法によりそれを実現しようと考えたのでもなかつた。これまでの論述を要約すれば、かれは道徳的・精神的に沈んだヨーロッパを人間性の陶冶すなわち教育により救済しようとしたのである。しかもかれは、「わがヨーロッパの悩んでいる害悪の根本的救済は、人類の合自然的な道徳的・精神的な配慮によつてのみ可能であり、それは家庭生活の純粹性と尊厳と力の復活によつてのみなされる」(VII. S. 465)とのべ、ここに出発点の家庭教育がふたたびクローズ・アップされる。これは人間性を二重構造的に把握し、道徳的人間性が感性的動物性を制しうるのは嬰兒に対する母親の教育によると説き、このような二重性を個体的存在と集団的存在、文化と文明という概念に発展させ、現代を墮落した文明の時代と判断するペスタロツチにとつて、国民文化形成の原理として当然の帰結である。

そのみでなく、家庭教育重視の思想はすでに「夕暮」に示され、かれの全生涯をその研究に捧げてきた確信の結果でもある。

ペスタロツチによれば、家庭生活のよき精神と国民の公共心とは共通するものであり、家庭教育を基礎としてこそ国民文化を担いその発展に貢献しうる自主的な国民が形成されるのである。わたくしはペスタロツチにおける家庭と国家の連続性を、家庭教育のうち<sup>注1</sup>に独立的国民の基礎としての道徳的・知的・身体的教育の出発点があり、その中核としての親子の愛、宗教的な愛が、隣人愛と祖国愛へと発展していくという点に求めたい。このようにしてかれは国家思想・社会思想の根底に家庭を重視しているのである。

しかしペスタロツチはすべてを家庭に課して満足しているのではない。たしかに家庭は国民教育の基礎となりうるものではあるが、家庭は「それ自身道徳的でも非道徳的でもない」(VII. S. 416)、いわば中性的存在である。たんに親子が共同生活を営んでいることが子どもの人間性の陶冶を可能にするわけではない。ペスタロツチによれば、「精神的なもののみが精神的に陶冶し、道徳的なもののみが道徳的に陶冶し、無欲的なもののみが人間的に陶冶する」(VII. S. 416)のである。それゆえいかなる人間が家庭を構成しているかということが重要となる。換言すれば、家族が陶冶されているかぎりにおいてのみ、その家庭もまた陶冶的でありうる。しかるに現実には文明の墮落の結果として「居間の掠奪」<sup>注2</sup>「Wohnstubenraube, が一般的となり、母親たちは子どもの人間性を陶冶するにはあまりにも無知無能である。そこでペスタロツチは「教育によつて現代の害悪を本質的に救済することのむつかしさの中心点はここにある」(VII. S. 434)とのべ、さらには、家庭教育と同じ原理に立つべき「国民学校もまた、現代の母親同様時代の要求を満足させるにはほど遠い」(VII. S. 437)と、家庭と学校の現実を歎き、事態解決の困難なことを痛感している。

たしかに、ペスタロツチのいうように、家庭生活の陶冶性は「個人が国家において教化され

ている程度に应じる」(VII. S. 417) のであり、国民文化全般の水準が個々の家庭におよぼす影響は大きい。そのかぎりでは「探究」のあの「環境が人間を作る」という思想があらわれている。しかしわれわれが同時に想起すべきは、それに続く「人間が環境を作る」ということばである。(VII. S. 106) かれの基礎教授法の研究や学園<sup>註3</sup>の創設はあたらしい環境創造の努力を示すものであり、また「純真者に訴える」という題名からしても、本著作も、祖国やヨーロッパの高潔な心もち、共通の目的に向つて協力するひとびとへの呼びかけである。かれはそのことをまず、「それについての確信が国民の最も高潔なひとびとに抱かれなければならない」(VII. S. 442) とのべ、さらに、「叡知と徳の個々の行為が叡知と徳の公共力(Gemeinkraft)に作用する」(VII. S. 443) とのべて、高潔なひとびとの努力がやがて国民の力を覚醒することを期待している。かれは人類と祖国に自己を犠牲にするそのような偉大な行為を、「現世および後世の尊敬と崇拜をうけるようになる」(VII. S. 443) と讚美しているのである。

このようにしてペスタロッチは、民衆救済・社会改善の主体を最後には支配者に期待する結果になつている。かれの政治論は現実の批判から出発しながら、政治にいつそう高い理念を与えることにより、いつたん否定した現実を目的実現可能なものとして肯定し、それに期待をよせるという不徹底な理論に終つている。現実の政治体制を破壊してよりよいものを作るのでなく、支配者の善意によりこと足れりとするかれの思惟様式を、われわれはかれのもつ理想主義的傾向といふことができよう。しかしそれにはまた次のような時代的制約がある。

かれは本著作執筆中の1814年にロシア皇帝アレキサンダー1世から謁を賜わり、そのさい皇帝によき国民教育と農奴解放の必要を説いており、またプロシア王ヴイルヘルム三世(Friedrich Wilhelm III., König von Preussen, 1797—1840)を訪れて、国民教育に対する王の熱意に感謝の意を捧げている。当時はまさにウイーン<sup>註4</sup>会議の最中であり、かれはこの著作において

も、「国王たちを中心とするヨーロッパは高まるであろう」(VII. S. 450) とのべて、病めるヨーロッパの救済をまず王侯たちに期待したのである。このように、絶対専制君主を鋭く批判しながらふたたび王侯の善意に依存しようとするかれの政治思想を、わたくしはかれのもつ歴史の限界とみなしたい。

しかしこれを国民教育という側面より考察するならば、当時ヨーロッパの各国において国民の普通教育に対する関心はしだいに高まりつつあり、ペスタロッチの教育思想はこのような歴史的状况のなかで位置づけられ、そこではだした役割は十分評価されてよい。かれはたんに王侯の善意だけに期待をよせたのではなく、政府の役人や実践家たちがかれの初等教育思想を具体的に組織し、実践することを望んだのである。そしてわれわれはかれの学園がヨーロッパに名声を高くし、各国から多くのひとびとがそこを訪れて学び、かれの基礎教育がヨーロッパをはじめ世界に拡まつたことを忘れてはならない。わたくしはかれの思想と実践の究極目的が国民教育の実現にあつたことをここにあらためて確認し、この小論を終りたい。

注1. デレカートは、ペスタロッチの意味する国家は拡大された家族社会であり、家庭から国民の精神的身体的力が生じることを指摘し、ペスタロッチの思想はルターが強調した「真の家庭のあるところに神の王国がある」という思想に終つているとのべている。

F. Delekat; "J. H. Pestalozzi", S. 254.

注2. 「白鳥の歌」"Schwanengeang", (1825)の有名な「生活が陶冶する」"Das Leben bildet", (X. S. 313)も同じ発想法である。「生活」そのものが陶冶的であるというわけではなく、ペスタロッチは陶冶的な生活を必要としていることはいうまでもない。

注3. ホイバウムは本著作において、「探究」にみられた「個人的・社会的陶冶」"Individual- und Sozialbildung", の相互作用をみている。A. Heubaum; "J. Heinr. Pestalozzi", S. 303

注4. ドウ・ガン著「ペスタロッチ伝」(新堀通也訳) 376—378頁

(昭和35年11月15日受理)